

トリエンナーレ学校 vo.2

講師：河崎晃一氏（兵庫県立美術館学芸課長）

テーマ：震災後のボランティアと美術館～阪神淡路大震災から15年～

天野：お話のテーマは「震災後のボランティアと美術館」ということで、今年で丁度15年となる阪神淡路大震災の起こった当時、芦屋市立美術博物館にお務めで学芸課長をされていた河崎晃一さん、現在は兵庫県立美術館のグループリーダーとして学芸の仕事されていますが、まさに震災の渦中にいらっしゃった河崎さんからボランティアの方と様々な活動をされたお話をして頂こうと思っています。

美術を巡って、我々が呼ぶところのサポーターと行う様々な活動があつて、一種の可能性のひとつとしてご自身の体験からお話頂こうと思っています。また、今日はそれに加えて兵庫県立美術館はボランティアとの活動をもう25年もしていますので、そのお話をして頂こうとも思っています。河崎さん、よろしくお願ひします。

河崎：はじめまして、よろしくお願ひします。今日お話しするのは、「震災とボランティア」ということで、ご承知のように、もう15年になるんですが、阪神淡路大震災が起こった時、私は芦屋市立美術博物館にいました。その時にボランティアと共に仕事をしたことをお話出来ればと思っています。私としては、実は美術館の仕事にたずさわったのが30代後半からでして、それまでは、今でも平行していわゆる作家活動といひますか、自分自身ものづくりという立場で学芸活動をしています。全国的に見ても、学芸員として勤めながら絵を描いたりしている方は多いとは思ひんですが、ずっと個展をやりながら学芸員の仕事をしているという方はそんなにおられないと思ひますので、珍しいといひるか、変な存在だと思ひます。大学も全然美術系ではありませんし、経済学を専攻して、どうしても大学をでてから美術に関わる事やりたいといひことで、そこから勉強しました。たまたま巡り合わせて画家の方のことを調べて画集を作ったり、雑誌の取材の仕事ことに携わる事が出来たので、実際に動いて美術の知識とかを身につけて来ました。ですから普通の美術館学芸とはちょっと違つた活動にならざるを得ない体質といひるか、やっぱり根本的に考え方が違ひな、と思ひ事があります。

1991年に芦屋市立美術博物館が動き出したのですが、ご存知の通り住宅地の小さな美術館ができて、その運営を16年間してしまひて、その前半の5年目で阪神淡路大震災に遭遇してしまつたんです。私は昭和27年生まれで、上の世代は勿論戦争を体験した世代です。そんなことから考えると大学を出て仕事をし出して、正直申しまして、恐らく一生災害には遭わないだろうなどのんきなことを考えていました。特に、六甲山という山があつて、雨による災害はあるんですが大きなものを体験したことはなく、戦争は日本ではもう起こらないだろうとのんきに思ひましたので、突如、大きな揺れのあと起きて街を見た時に、直感的に、ああ1万人は死んだだろうと思ひました。実際は約6300人に留まつたのが不思議なくらいで、あの時間だつたからといひのがあつたと思ひます。

最近たまたま神戸新聞の随想といひ欄で、3週間に1回くらい書く場面があつて、最初の2回は震災の事を書いてください、といひられていて、震災後の記憶を呼び覚ましながら書いたんです。震災から今年で15

年なんですね。何かそういう大きな出来事があって、記念としてもものを書くとなると、どうしてもその前の戦争のことを考えますが、戦争の15年後って昭和35年なんですね。まさに高度経済成長期のまっただ中です。それだけ当時の15年と現在の15年って成長の度合いが違うと思います。「今や戦後ではない」という言葉が経済白書からあったと思いますが、インターネットで調べますとあの言葉は昭和29年なんですね。10年経ってない時に、もう戦争からは脱皮しようという国としての姿勢があって、震災と戦争とを一緒にするというのは無茶な話ではありますが、そういうダメージを受けた後の復興としては随分時代の差があるな、と思います。そんな事を考えると、今年が平成22年で、昭和になってからだと第二次世界大戦が終わっている時代で、あっという間に時間が経っていくなという感じがしています。

15年前の震災の後、美術の関係ではなく、すごい数の「ボランティア」という言葉を地元からも周りからも聞きました。それまでボランティア活動というのはそんなに大きな声では言われなかったし、インターネットで「ボランティア元年」って調べると必ず1995年と出てきます。その後が、福井のタンカーから重油が流出して、海岸で重油を吸い取るボランティアが随分あったと聞いていますが、それ以降、ボランティア活動は非常に活発になってきたと思います。ひとつには、やはり仕切っているのは公的なところで、ボランティアが成立するのはパブリックなところなんです。よくよく考えるとボランティア活動というのは非常に身近なもので、例えば学校のPTAやクラブ活動の外部コーチなどもあげられます。恐らく、ボランティアの根源はキリスト教や宗教的な募金活動といった、協会や宗教の為にみんなが力を合わせて色んなものを売ったりして資金を稼いで、捧げるといった動きだと思います。PTAや自治体や、全てボランティアで動くというシステムになっています。公の為に募集されて、活動をするというのは震災の後のボランティアの、無償の活動のお陰だと思います。私も震災の後、家でガスも水道も止まっていた風呂がない。たまたま芦屋で温泉で出ている、それを公衆浴場としてボランティアの方がテキパキとそこの仕切りもしていました。

震災の時にボランティアが美術館とどう関わって来たかをお話しようと思うのですが、前にいました芦屋市立美術博物館は、震災の前にボランティア制度を全く取り入れていませんでした。震災のときにも、奈良に住んでいる学芸員志望の同志社大学の学生が「何かお手伝いできないか」と電話がかかって来たのを覚えています。

美術館でのボランティアと、今日お話することはちょっと違うと思うんですが、「写真ヘルプネットワーク」のボランティア活動は、我々としては大変意義のある短期間のプロジェクトが出来たのではないかと思います。

ボランティアの意義って言うのは自分自身が企画して、とかではなく、とにかく奉仕の精神というか、その中で自分自身のプライドや社会的なステータスが宿っていくというのが自然な姿で、震災後の財政難で、美術館を運営していた財団も解体してしまい、経営の基盤の置き所がなくなってしまったんですが、その時に役人が言ったのが、「お金がないからボランティアにやってもらおう」という発想なんですね。これはとんでもないことで、「ボランティアを活かすも殺すも役所の考え方次第」と言うか、その体質というのが非常に難しいなと思いますし、そこにプライドがないと難しいと思います。今日はそこを根底にお話をさせていただきます。

芦屋市立美術博物館というのはかなり地元の美術に特化した展覧会活動をしていた美術館です。街自体が、特に明治時代の後半以降は大阪商人たちが移り住み、そこで育って来た画家たちや音楽家といったいろいろなジャンル、もうひとつは郷土資料館の部分、歴史を調査して紹介していく部分の複合施設でしたので、色んな芦屋の古い資料を紹介するというのが展示の大きな方向性でした。その中の美術分野に昭和初期の時代からの近代写真を担った新興写真家の中山岩太という写真家がいる、東京都写真美術館で1年前に個展がありました、その方の写真も紹介していくことがひとつのジャンルでした。この方は今でいう非常に抽象的な実験写真を試みた方で、1920年代にニューヨークやパリで過ごされて、特にパリではピカソや藤田嗣治と親交があって、本当は絵描きになりたかったけど藤田から「お前は写真でいけ」と言われたという人です。その後東京に戻って写真館を営むのですが、芦屋にお客さんが多いという事で、昭和5年に芦屋に写真スタジオを開いています。中山自身がなくなったのが昭和24年で戦後すぐなんです、その後は中山写真スタジオという名前で息子さんが後を継いでやっておられました。その建物の中には、中山岩太のネガですとかあらゆる資料があって、未亡人がしっかり管理されていました。震災の年(1995年)に、ちょうど生誕100年で展覧会をやろうと決めてましたので、94年の12月にご挨拶にあって、このような資料を出してほしいとお願いをしていました。震災後、2日後にはご自宅の前まで行って安否確認をしました。当時は携帯電話もないですから、家がつぶれてもどこかに避難をしていたら家の前に張り紙を貼って、避難先の電話番号を書いておくということを皆さんやっておりました。中山さんの家にも張り紙がしてあって、電話をしたら全員無事でした。ただ建物を見ますともう斜めになっていました。その時、瞬間的に感じたことは、写真は雨ざらしになると駄目になってしまうということです。戦前戦後通じて活躍をされて来た方の資料が、戦争や空襲をくぐり抜けて来たものが、放っておくとゴミになってしまう、今なら助けられることが頭をよぎって、学芸員と一緒に引っ張り出させてほしいとお願いしました。でもとても家に入る事も出来ない状態でした。2月上旬に文化庁が企画した「文化財レスキュー隊」という、お寺や神社などのから重要文化財や大切なものを引っ張り出すという、それに対して文化庁がボランティアの人たちと共に、入って救出しますというものがあった、すぐに返信FAXを書きました。でも全然返事がなかったんです。その間文化庁が何をしていたかという、中山岩太とは一体何者なのか。単なる地方の一芸術家ではないかと思われていて写真美術館に問い合わせをしていたということの後日関係者から聞きました。そこで写真美術館が、写真史上で重要な方だと説明をしてくださって、それならば、ということだったようです。

そして2月20日、スタジオに集合し、ネガですとか資料を取り出して芦屋市立美術博物館へ保管しました。これがスタジオですが、昭和5年の建物です(写真)。今見ると、そんなに損傷していないようですが、中はひどくて、元の壁の方が見えている部分が少ないような状態です。2t車が1台ほぼいっぱいになって、美術館に運びました。

普段は綺麗な街なんです、全壊・半壊・一部損壊が92～3%で小さな街の全部が被害を受けました。当日は震災より一ヶ月経っていて、毎日暗い話題ばかりでしたから、新聞各紙で「文化財レスキュー大活躍」ということで取り上げて頂きました。この後数件、お寺など、文化庁が本来やらないといけないと思っていたところを救出されたとのことですが、第一号が今まで手をつけなかった近代写真でした。新聞が出たお陰で、美術品を救わなくてはならないという機運になってきたと思います。ここからがボランティアとの関わりの始まりです。

報道された後に、写真の関係をしている方から「この後どうするの」と言われましたが、とにかくひどい状況でしたのでまずは整理をして、また先日電話をしてくれた学生に連絡して、翌日からきて掃除をしてもらいました。その写真関係の方は、元々は「写真ヘルプネットワーク」というのを立ち上げて、基金を募って写真家に援助をしようという事をされていましたが、ただ、実際には大きな動きはなかったので、同じ歴史的な写真を救う、ということで一気にボランティアを募って中山岩太の資料をつくることになりました。写真のプリントされたものは兵庫県立美術館の学芸員が研究をされていたので、兵庫県立美術館に保管されておりアトリエには殆どの紙焼きをした写真はなかったんです。ただ、当時 6000 カットのネガがありました。まだ見た事がない作品のネガも含めて、全てを紙焼きすれば中山岩太の全貌が見える。写真は、今でこそ芸術と認められてきましたが、中山岩太の時代、昭和初期はなかなか写真が芸術として認められないし、ましては流通する事はありません。発表されるとしても写真原稿としてで、あくまで写真は記録と報道であるという時代に芸術写真をやっていた人ですので全貌が知られている写真家はほぼいなかったんです。そこで、ボランティアと集めた基金でやらないか、という話がありました。そこで、朝日新聞に載せてもらってボランティアの募集を始めました。3月初めから集めまして、4月にボランティア説明会をしたところ 110 人くらい来ていただきました。ボランティアの方は、なんとかして写真をどうにかしたいと思っている人が多くて、私達としては恐らく震災がなければひとりの写真家の写真全てを焼こうとは思わなかった訳で、ちょっとボランティアの方々には後ろめたい感じはありましたが、勢いと写真関係のかたの協力体制に押されまして、約3ヶ月間作業をやりました。説明会の段階で、これだけ集まっているなら私は必要ないだろうと帰られる方もいましたが、のべ 80 人の方が残られました。その方々の内訳は、まずは写真関係の人たち、中山岩太の名前を知っている人、逆に名前も知らないしプリント作業もしたことないという人、炊き出しなんかは体力的にもできないけど、これなら私にも出来るという事で集まった方もいました。実際に仕事が始まった時には、いろんな作業の仕分けがあるのでその段取りや仕事の仕分けもボランティアのリーダー格の方にして頂きました。

美術館の体験学習室を全て暗室にして、そこでベタ焼きというネガと同じ大きさに焼いていくという作業をしました。薬品を3種類、秒単位でやりますので一般の方には出来ないようなことや、かなり神経を使うような仕事をやって頂きました。プリントしたものを全て台紙に張って、年代等を記入していくというような作業を火曜日から金曜日まで朝10時から夕方5時まで、毎日10人くらいで約2ヶ月間やっていきました。我々としては、みなさん一人一人ににお礼をする事は出来ないのですが、中山岩太の展覧会のカタログに、謝辞としてみなさんの名前を入れさせてもらいました。その時に関わってくださった写真関係の方とは今でも交流があります。一番遠い方で和歌山から来られた方がいまして、写真ヘルプネットワークの基金で旅費だけはお支払いしていました。材料は、一部は写真材料会社に掛け合って無料で提供して頂きました。現在でも整理された資料は全て芦屋市立美術博物館にありますし、中山岩太の研究者にも公開しています。また、兵庫の美術館に保管されていたビンテージプリントも 2000 年になってからデジタルデータにして作品集として出版しました。これで、中山岩太の全貌を紹介するという仕事が終了しましたが、この一連の仕事は写真保存学会から特別賞を頂いて評価して頂きました。

15年経って思うのは、震災後のボランティアの意識の高まりの勢いはすごかったと思いますし、他にも街の復興のためにいろんな活動をしていらしたボランティアや、今でも神戸では街の為に動いているボランティアは随分沢山いらっしゃいます。そろそろ震災をきっかけにしたボランティアというのは今でも必要なものと、その時期だけに必要だったものに分かれていっていると思います。

最後に、これは7月19日東京と大阪で朝日新聞が取り上げた記事なのですが(写真)、見出しが違うんです。東京の方はボランティア主役で、大阪の方は遺作写真蘇るという内容です。新聞にも大きく取り上げてもらいましたし、美術館とボランティアの結びつきのきっかけになったのかなと思います。その後、芦屋では恒常的ボランティアは生まれませんでした。震災関連の展示会を5年の時と10年の時に開催しました。特に10年の時は記憶をテーマとした展示会でしたので、当時のコメントを寄せたりとかをしました。そういう事も全ては震災で共有した記憶がきっかけになっていると思います。以上が中山岩太の震災後のボランティアについてのお話です。

芦屋市は、震災後に貧乏をしたので文化的な活動は全て辞めるという発言をして議会も通ってしまい、美術館も休館するという話があったんですが、その時も美術館を救おうというボランティアの方々がNPOを立てて、美術館の運営を業務委託という形で請け負いました。その時には私自身は兵庫県立美術館の方に移りました。

兵庫県立美術館はボランティア活動がはじまって20年になります。その記録を一冊の本にまとめられるくらいやっています。最初は10人で始まったものが、現在では登録人数として236人もいて美術館のボランティアの規模としてはかなり大きいです。どんな活動をしているかという、1月に、翌年度のボランティアを募集します。だいたい70~80の方が応募されるんですが、そこで毎週土曜日に5回ボランティア養成講座を受けます。美術館やボランティア活動などのレクチャーを受けて、それを聞いた上で登録するかどうかを決めてもらいます。20人くらい変動するようですが、だいたい200人越えでキープしています。それぞれ班分けをしていて、5つの班に分かれています。「事務局をやる方」、新聞や本の整理をする「資料班」、ギャラリートークをする「解説班」、解説に関しては、常設展は毎週金曜と土曜で特別展は毎週日曜日に20分くらいのギャラリートークやスライドレクチャーをしています。それから「子ども班」は小学生・中学生のワークショップ等のサポートをしていただく方。また展示会に関する活動では、県展の受付、補助などですね。後は2年前に三鷹のジブリ美術館でやった「3匹のくま」という展示会の時には子どもたちに絵本の読み聞かせをやってもらったんですが、30人くらい集まりまして、週1回で一日に3回やりました。

また、兵庫県立美術館では視覚障害の方を対象とした、ロダンの作品なんかを触れるような展示会が毎年夏から秋の時期ありまして、そのお手伝いをやって頂いたりしています。また展示会以外のDM発送の仕事であったり、映画の上映会といったイベントのお手伝いをしています。年齢構成としては50代、60代の方が多く、学芸員よりも社会経験も多く判断力にも長けた方が多いので、若い学芸員が説教を受けたりしています。勿論若い方も多いです。

美術館ボランティアも20年も活動をしていますので、活動の要領というんですが、内規的なものがあります。主に学芸グループの担当者が作ったものをボランティアの方にサポートして頂いたり、資料なんかはほとんど

ん溜まっていきますので、資料担当の方に渡して整理をしてもらいます。ほとんどの場合、学芸員の指導、プランニングの元、活動されています。入れ替わりはありますが、古くからの方が指導的な立場に立ちまして、特に来館者と直接接しますので話し方なんかを指導するというとても良い関係になっています。僕自身、担当になったことはないですし、兵庫に勤めて4年ですが、担当した展覧会ではお世話になったという程度のボランティアさんとの関係ではありますが、かなり積極的ですし、こちらから投げかけたことへの吸収力はすごくて、単独でも説明を求めてこられます。こちらとしても勉強して頂きたいので、解説されている方へは文章で書かれているキャプションについて説明してもらったり、ボランティアのおすすめという、学芸員が難しい専門的なことを説明して絵のことは全然わからない、というものではなくて、もっと、私はこういう風に見た、というようなサポートになるような言葉を書いていただいたりとか、こういった事をしながらボランティアさんと美術館を運営していくというようなスタンスをとっております。

非常に大雑把なんですけど、今日お話しすべき事は大体お話出来たと思います。聞かれていて疑問に思われるものとか、いやそうじゃないだろうというご意見もおありだとは思いますが。僕自身は美術館の学芸員という形でやってまして、サポートして頂く方というのは非常に重要な位置を占めると考えています。学芸員以上に、来館者の方との接点が多いというのがなによりで、学芸員は意外と、一般の方との接点が少ないんですよ。よくアンケートに「学芸員の方とお話し出来て良かった」と書いてあるんですけど、来館者の方の一番近くにいる方は監視員の方なので、そういう意味では解説をやって頂いているボランティアの方は、来館者との接点が一番多いという点では、どういう意見が出ていたとか、どういう風に言っていたとか、展示の仕方が悪いとか、アンケート以上に意見を聞いています。展示の中には、ボランティアさんに非常に評判が悪くて、「あそこはパスして説明します」とはっきり言われてしまって、こっちは板挟みになってしまうというような部分も実はあります。何かご質問があればここで受けします。

質問者：前回の横浜トリエンナーレのサポーターのことなんですが、芸術を文章を書いたりしてわかりやすく説明してくれる人がいたら良いなと思いますが、サポーターはあんまり説明をしてはいけないという話があったとも聞いています。今回の話を聞いて、その大切さがとてもよくわかりました。

河崎氏：芸術作品を言葉で表すって非常に難しいんですよ。100人いたら100人違う事を感じますし、どこから引っ張ってきたらそれはパクリになるし、誰々がこう言っていましたっていったらただの引用になってしまうし。僕は「言葉で言い表せられるなら、最初から作品を作らないよね」と言ってしまう人間なので、ちゃんと説明出来るようにしなきゃだめよと言われるんです。私がもう少し勉強しておいたら良かったなというのが、50歳過ぎてからの正直な気持ちで、もっと美術の事勉強しておいたらもっと面白い事言えたのにな、と思います。誰でもわかる、それだけのものを書く為には、本を読んだり他のものを見たり、どれだけ勉強してたかにかかってくるので、ボランティアさんに解説をしてもらうのもまずは入門のガイド解説をしてもらって、「一般の人の目線と言う素朴な疑問を聞いて下さい」といっています。絵を前に、この作家は何年に生まれて、何々会に所属して、とかそんな事はどうでも良いんです、と。絵を見て何を思ったか、その絵から何を連想したかとか。それによって、絵を見る方がこういう感じ方もあるんだという風に思っても

らえればと思います。そういうことは、実は学芸員はあんまりしないんです。というより出来ないんですよ。そういう意味で、ボランティアの方の意見っていうのは非常に大事なんです。

展示内容によっては、ボランティアの方に解説はさせないという場合もあります。これは日本だけでなく海外でもであると聞きます。でもプロの話の聞いたら分からなくなるという事もありますし、その辺は非常に難しいところではあります。

山野：最初にご挨拶をした天野が、今やっている美術館の講習で抜けまして、私が進行を代えさせていただきます。よろしくお祈りします。今から質疑をしたいのですが、私の方からもひとつお聞きしたかった事があります。震災の時にボランティアというのが話題になったんですが、優先順位みたいなものは当時出なかったんですか。つまり文化財より人間の方が先じゃないとか、そういうことってあったのかお聞きしたいんですが。

河崎：それは確かにありました。文化財レスキューというのがあると FAX で入ったのが 2 月の始めなんですね。つまり、震災から 10 日以上経っています。まずは人命なんですけど、やはり 10 日というのはひとつの区切りだと思うんですね、人間が生きてるか、生きていられるか、という。実際に最初の何日間かは、刻一刻ですから、1 日目と 2 日目、2 日目と 3 日目は全然違ったんです。例えば 1 週間目に、どこからどこまで開通したとか、刻一刻と出てくるんです。勿論、亡くなった方の数は 100、200 と刻一刻と増えていく。今でも忘れられない事は、ひとり芦屋の学芸員で市の職員の身分をもった学芸員がいたのですが、彼はすぐに人命救助で集められたチームの方に入って、10 日目で帰ってきた時に「あれだけ人が死んだのを見たのは初めてです。」と言ったんです。その事を聞いて、やっぱり申し訳ないなという気持ちはしました。最初は人命が優先というのがあるんですけど、やっぱり 10 日以上経つと現実をみなきやいけないというか、そういう部分もあります。災害から半年ちょっと経って、マンションの解体現場から遺体が収容されたというのもある、それが最後の亡くなった方の収容だったと。要するに、マンションが崩れてるからそこは行けない状態のところまで亡くなっている事は確認出来たようです。刻一刻が必死だったというような感じです。実際に、私の親戚と親しくしていた画家の方が亡くなられたと聞いたのが一週間目でした。

もうひとつは、我々の身分は財団の職員だったんですね。今言った彼は市の職員だったんですが、その時初めて、市の外郭団体の命令系統というのはないな、というのがわかったんです。我々には命令は下りてこないんです。その時に分かったのですが、役所的な構造だなと思いました。命令が下りてこないんで、救命というよりは美術館として動きました。美術館では芦屋の歴史を収集の対象として集めていますから、被害状況を記録におさめるというのを始めてあちこち動き回ったというのがあります。作家の安否と、どういう風に救出していくかというようなことをしました。

それからもうひとつは、美術品は雨に濡れたらだめになるというのがあります。幸いにも 1 ヶ月雨が降らなかったんです。

山野：ありがとうございます。今日、2 回目のトリエンナーレ学校で何故河崎さんに来て頂いたかというところ、アートという枠を取っ払って、ボランティアの基本を一緒に考えましょうというところがあります。天野はかなりそこに拘ってまして、トリエンナーレは 3 回行われましたがその度にボランティアの役割なり位置

付けなりが変わってきたんです。2005年のサポーターの関わり方と2008年の関わり方は違っている。そういう意味ではスタンスが固まらないまま来ている。2008年が終わると一旦解散して、引き継がれたのか分からないまま、また新しく始まるということを繰り返しているのです。では一体ボランティアというのはどういう役割があるのかという部分を一度見直してからトリエンナーレの準備をしていこうと思っています。ですから、少し遠回りな話ではあるんですが、一般論としてボランティアの役割を少し整理してお話し頂ければと思うのですが。

河崎：ボランティアというのは自分自身で積極的に動かないと続かないと思います。割と短期間集中だと思わんですが、基本的な部分は公的な事へのお手伝いで、PTAの役員や自治会の役員なんかと一緒にですし、ミッション系の学校なんかですとバザーっていう催しがありますが、みんなで手伝って売り上げは全部寄付するというようなボランティアそのものです。みんながひとつのものに向かって一緒にやっていくところなんです。作家さんがこれこれをしたい、と言った事に対して、色んな事をやっていく達成感、やる前に結果が見えるのではなくて、やってからの達成感があると思います。その中でプライドも出てくるし、社会的なステータスも出てきて充実してくるんじゃないかな、というのが僕自身の気持ちです。

山野：ありがとうございます。私自身も黄金町バザールというのをやってまして、登録したサポーターさんに集まって頂いて、色んなお手伝いをして頂いて助かっています。ただ、スタッフがサポーターさんをお願いする事を躊躇してしまっていて、それは自分の仕事とサポーターの仕事の区別が出来ていないんです。自分たちは給料をもらってやっているけど、サポーターのみなさんはそれをただでやっているという認識になった時に非常に躊躇するんですね。サポーターさんに集まって頂いても、むしろあまり仕事を頼もうとしないケースがままあります。それからもうひとつは、出来るだけ楽な事をやらせようという傾向があります。根本的にボランティアやサポーターという立場を選んだ方と、スタッフとは元々が違うはずなのに、いざ現場が始まるとはっきり区別ができなくなっている。そのモチベーションの違いは、恐らく的の違う目的があるんじゃないかなと思うんですよね。例えば今度のトリエンナーレのサポーターに登録をされたみなさんにとっても、恐らくは楽しい事ばかりじゃないはずなんです。それでも続けていく事によって、達成感が得られて自分の中で構成していける。それを一緒に仕事をする我々も理解するという仕組みを作っていないと、やっているうちに段々曖昧になってきてしまう事があり得る。その事についての河崎さんの答えと今日いらっしゃっているボランティアの方にご意見やご質問を伺いたいと思います。

河崎：一番難しい部分なんですけど、こういう風にボランティアの養成講座が必要と同時に、ひょっとしたらボランティアを仕切る人たちの養成講座も必要んじゃないかなと思います。全体の中で、どの部分をボランティアの方をお願いするか、一緒にやるか。それをきっちり仕切れないといけない。皆さん仕事をなさったら、変な例えですが、自分の部屋を掃除するとき、誰かに頼むとしたらひとつひとつ説明をしていきますよね。捨てられたらいけないものを捨てられたら困るし。でもそれは自分でやった方が手取り早い事もあると思います。結果だけ見たらそうなんですけど、説明しきれないからそうなってしまって、きっちり説明出来れば自分は他の仕事ができるのです。だからボランティアを仕切る側の養成講座が必要かなというのと、

ボランティアの方にとっては指示を出してもらえれば一緒に考えてやりましょうというアドバイスもボランティアの方から頂く場合もあるし、かといってボランティアの方が暴走していくと違う考えになってしまってそこでぶつかることもあるし、実際に現場では浮いてしまってるんです。でも言う事は言っていないと、折角手伝いに来てもらっているのに手伝いにもならないとどうしようもないし。やり始めてみるとそれぞれの意見が違うので一番難しい部分ではあると思いますが、仕切る側が必要だと思います。

山野：ありがとうございます。では、会場の方からのご意見を聞きたいと思います。

会場：こんにちは。私は今回、ボランティアの登録をしています。私も色々とボランティアをやっているのですが、今のお話は非常に身に沁みて分かるお話でした。ボランティアを受け入れる側の講座をやらなきゃいけないというお話がありましたが、それは私もすごく感じます。というのは、自分は主に横浜の美術館でのボランティアをやっていますが、受け入れる側にボランティアを組織運営するプロフェッショナルがいないように感じます。勿論、受け入れる側も努力をなさっていてそれに不満はないのですが、やはり個人の質に依存している場合は多々あります。未だ、ボランティアコーディネーターのような団体があるんですが、受け入れる側の訓練をしないと資格がとれないんですが、そういう人が主催者側にひとりでもいたら良いかな、と思います。それから、山野さんのお話で、スタッフ間でこれをボランティアに話したらまずいんじゃないかと思っちゃうというお話ですが、私がやってきて特に楽しかったのは、これはちょっとまずいだろうというようなタフでないといけないような状況が何回もありましたらそちらの方が充実していました。全員が全員そう思っていたわけではないと思いますが、私個人はそう思っていました。以上です。

山野：黄金町でいうと、組織そのものが小さいのでボランティア専門の担当みたいにはしていません。なんとなく窓口をやっている人は出てきますがトレーニングを受けている訳ではない。ですので、どのように対したら良いのかというのがこちら側が分かっていないと言う事で、色んな問題が起こったりこれまでもありました。それはトリエンナーレでもあったと思います。トリエンナーレは黄金町をはるかに超えた大きな動きになると思います。ですので、ボランティアさんをコーディネートしていく、しっかりした考え方をもった担当を置いてやっていくという事になるし、絶対に必要になると思います。ありがとうございました。

会場：今、仰ったご意見に、私もある意味賛成です。色んなボランティアをやっていると、肉体的にも精神的にも苦勞をしました。苦勞をしたもの程、達成感があったというのもあり、ボランティアの立場からいうと、これはあんまり大変なんじゃないかと心配されない方がいいかなと思います。ただ、苦勞してやったというクリエイティブな段階での達成感。出来たものの出来映えを評価されないと、非常にがっかりします。例えば常設の作品でもお客さんが誰も来なかったという非常につまらない事になってしまうと思いますが、兵庫県立美術館ではその為にどんな活動をしているのでしょうか。例えば、先程は小学生を対象にした活動について伺いましたが、それ以外に何か、お客さんを集める為に美術館としてこんなことやってるよという事があれば聞かせて下さい。

河崎：例えばギャラリーツアーをやっているということはチラシにも書いてあるんですが、日によってなかなか集まらない日もあって、正直0という日もあります。その場合でもやるというのは、ボランティアさんはひとりではなく数人で仕切っておられますので、ボランティアさんがボランティアさんを相手に解説するというのをやって、お互いの研修にします。それはボランティアの自主運営に任せています。ボランティアさんにやっていただくために仕事を作るという事はあまりやっていないです。

山野：全く反対の悪い例なんですけど、ボランティアの登録数がものすごく多い美術館があるんです。アーティストがレクチャーやったりワークショップやったりとか、ギャラリートークやったりとかする時に、ほとんど広報をしないんですね。何故広報をしないのかというと、ボランティアさんだけでも満杯になっちゃうんです。他の人に声をかけなくても観客動員できちゃう。それで、喋ってるアーティストとかが会場に行くと、満員すごいと思うんですけど全員ボランティアなんです。だから、身内だけで情報が流れて外部に流さなくても十分に席が埋まってしまうという状況なので、広報は非常に遅いし、来なくても大丈夫ですよ、みたいなこういう例もあります。ですから、その人達がアーティストの周りを囲んでいる事によって、外にいる人達にとって非常に入りにくい状況になっていて、兵庫の例ではボランティアさんが全面に立って外部の人を迎え入れているという構図になってはいますが、僕が知っている例ではそうになっていないんです。むしろ壁になっているというケースもあります。

河崎：私も、ある美術館のオープニングにいて随分沢山の人が来ていると思ったら、実はみんなボランティアなんですよ、なんていう場合もあるので、例えば会場が混んでいたら立って聞いていただくとかあくまでも館側の立場でいて頂きたいと思います。

会場：今日のお話の中で、期間限定のボランティアと恒常的なボランティアと、2種類のお話のように考えられるのですが、そのマインドの差なんかを感じられるのかと、それから震災時のボランティアがその後継続して発展的に、新たにボランティア活動をしているという事例があるのかをお聞かせ下さい。

河崎：震災後のボランティアで恒常的に続けられたというケースはあまりないと思います。我々がその後もおつきあいをして、美術館の事をお願いをしたり協力をして下さったりという事はあったんですが、組織としてのボランティア活動というのはいないです。やっぱりボランティアというのは短期決戦で盛り上がるからできるんじゃないかな、と思います。トリエンナーレのようにひとつの目標が見えているというのが重要なんじゃないかなと思います。やっぱり自分を見つめて自分はどこまでできるかというところで、区切りをつけてるからできるんじゃないかな、と思います。

会場：行政の人がボランティアを募集すると、立場の違いがあるので変な遠慮があるという話があったんですが、それはすぐに馴らせるんじゃないかと思いました。というのは、行政の人がボランティアをやっちゃいけないというわけではないので、そういう意味でフラットにしまえば問題はないんじゃないかなと思いました。そういうことをやって実績をあげている地域もあるし、後は意識の問題で、ボランティアの基本

認識が欧米と日本では違うのかなと思います。実際の職員とサポーターの違いについての正しい認識が分かったらいいかなと思います。

河崎：欧米と日本の違いというのはやはり宗教的な部分ではないかなと思います。言葉になりませんが、やはり根本的な認識の部分だと思います。日本では「ボランティア生かすも殺すも役所次第」だと思います。「予算がないのでボランティアで・・・」という役人の言葉を聞いた時には非常にショックでしたが、やはり認識が違うんじゃないかなと思います。

会場：常任ボランティアという人はいらっしゃると思うんですが、トリエンナーレのような短期のものでなら分かるんですが、長期のものであっても、あえて無償でそのひとのやる気だけで来て下さいというその意義、ボランティアでなければいけないというその意味を教えてください。それはやはり経営の問題にも関わってくるのでしょうか。

河崎：ボランティアと雇用との違いが大きな違いだと思います。それまで公立だった美術館が指定管理者制度になって民間になった場合、民間でボランティアをしようと思いますか？例えば新聞配達をボランティアでしようとか思われますか？やっぱり公的なパブリックな部分があるからこそボランティアという気持ちが出てくると思います。先程の役所の話でもそうですが、人件費としてカウントできる仕事であるのか、人件費をもらう為に仕事をしているわけではないんだという気持ちの違いだと思います。そういう意味で、ボランティアと雇用は全く違うと思います。

山野：黄金町の場合は実例がありました。サポーターの方が働きたいと仰って、一ヶ月限定で働いて頂いた事があります。やはり全く違うんですね。サポーターとして参加するのと、雇用されて給料をもらいながらするというのは精神的にも違うし、立場的にも全く違ってきます。これは、今までサポーターだったという関係を切り捨てて全く新しい関係をつくるという事なので、似て見えても実は全く違う事をやっているんです。やはり全く違う事を目的に来ているんだという事を感じました。

時間がそろそろ来てしまいました。まだまだ話足りないという方はお茶とお菓子を用意していますので、この後もどうぞ残って下さい。本日はどうもありがとうございました。